# 今週の為替相場見通し（2024年3月18日）

| 総括表 | | 先週の値動き | | | 今週の予想レンジ |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 注 | レンジ | 終値 | |
| 米ドル | （円） | | 146.49 ～ 149.17 | 149.08 | 146.00 ～ 151.50 |
| ユーロ | （ドル） | | 1.0874 ～ 1.0963 | 1.0888 | 1.0750 ～ 1.1000 |
| （1ユーロ=） | （円） | | 160.22 ～ 162.41 | 162.30 | 160.50 ～ 164.00 |
| 英ポンド | （ドル） | | 1.2726 ～ 1.2863 | 1.2732 | 1.2500 ～ 1.2900 |
| （1英ポンド=） | （円） | * | 187.97 ～ 190.03 | 189.83 | 187.00 ～ 193.00 |
| 豪ドル | （ドル） | | 0.6552 ～ 0.6638 | 0.6560 | 0.6500 ～ 0.6650 |
| （1豪ドル=） | （円） | * | 96.90 ～ 97.97 | 97.77 | 96.00 ～ 98.50 |

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

## 1．米ドル

金融市場部　為替営業第二チーム　岩下　義明

### （1）今週の予想レンジ：　146.00 ～ 151.50 円

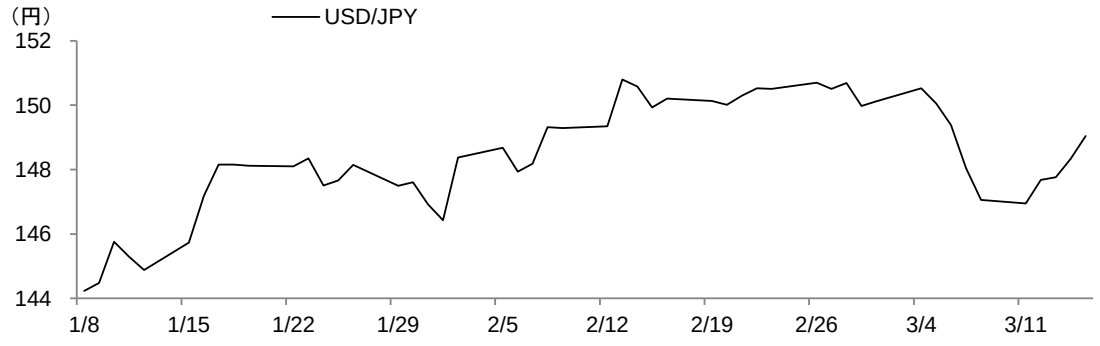
### （2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場はじわじわと底値を上げていく展開。週初11日、146.80円でオープン。翌週のBOJにてマイナス金利を解除するとの思惑による円買いと米金利上昇による円売りが交錯し、結局147円付近でクローズ。12日、東京時間に植田日銀総裁が個人消費について「弱めの動きがみられる」との認識を示したことで円売りが進み147.40円付近まで上昇。その後の米2月消費者物価指数（CPI）では前年比・前月比コアCPIが予想対比強く出たことで発表直後はドル買いが進むも、住宅除くコアサービスが減速したことなどが材料視され一時147.08円までドル/円は下落も戻されるなどボラタイルな動き。13日、東京時間は春闘の満額回答が相次ぎ、日銀のマイナス金利解除の思惑からドル/円は147.24円まで下落。円買いが一巡すると徐々にドル買い優勢となった。NY時間に「日銀が来週のBOJでマイナス金利を解除するか議論する」とのヘッドラインが伝わると一時147.44円まで値を下げるも、その後は反発した。14日、東京時間では日経平均株価がプラスに転じたことが好感され148円手前まで上昇。NY時間に再び日銀のマイナス金利を解除する旨の報道が伝わると瞬間的に147円前半まで円が買われるも、米2月コア生産者物価指数（PPI）が強含んだことを背景にドル買い優勢となり148円前半でクローズ。15日、「日銀が翌週のBOJでのマイナス金利解除で最終調整入り」とのヘッドラインで148円付近まで下落するも、長続きせずすぐに戻される。その後は米短期金利上昇とともにドル/円も上昇し149.08円で越週。

今週のドル/円相場はボラタイルな展開を予想。今週の注目材料としては19日（火）のBOJと20日（水）深夜のFOMCだろう。BOJは先週立て続けに出てきた報道通りマイナス金利解除がコンセンサスであるものの、ドル/円の動きとしてはヘッドラインが出た瞬間は反応するもその後直ぐに押し戻されている。すなわち市場は利上げはあくまでもBOJの超緩和姿勢の終焉であり、他の中銀のような金融引き締めの利上げとは別と見ていることが伺える。BOJでは今後の金融引き締めに関して言及があるかに注目したい。FOMCに関しては、DOTSチャートの今年末中央値が前回の3回利下げ予想から変化しているかに注目したい。今までのところ利下げ回数の減少についてはタカ派の少数の地区連銀総裁からしか出てきておらず、中央値の水準が上がっているとなると米高金利継続からドル/円の上昇リスクになる。しかしドル/円の水準的にはすでに現在149円とかなりの円安水準まで来ており、151円を超えて円安になってくると介入警戒感が高まってくることから一方向で上値を試していく展開にはなりにくいと思われる。

### （3）先週までの相場の推移

先週（3/11～3/15）の値動き：　安値 146.49 円　高値 149.17 円　終値 149.08 円




（資料）ブルームバーグ

## 2．ユーロ

金融市場部　為替営業第二チーム 部坂 洋太朗

(1)今週の予想レンジ:　1.0750 ～ 1.1000　　160.50 ～ 164.00 円

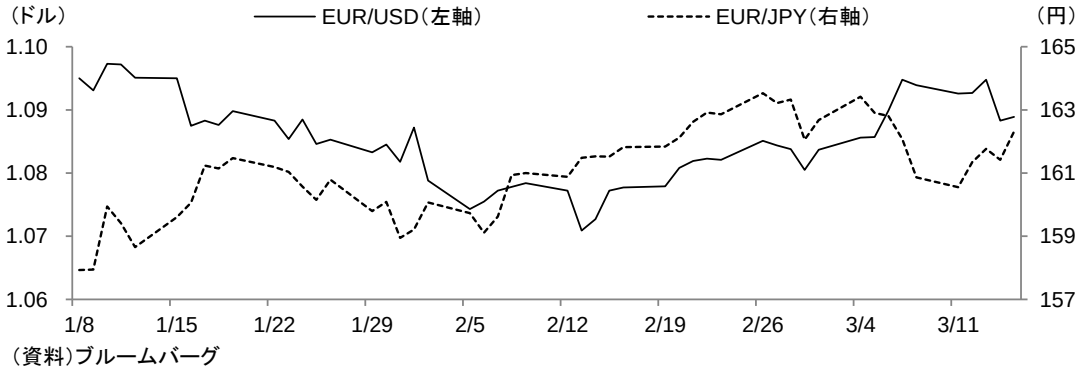
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、週後半に米金利上昇を受けてドル買いユーロ売りの流れから小幅の下落となった。週初11日、1.0943でオープンしたユーロ/ドルは値動き乏しいなか、米国時間に米金利上昇を受けて1.0915まで下落となった。12日、ユーロ/ドルは米2月消費者物価指数が強い結果となったことを受けて、発表直後に1.0902まで下落するも、その後は買い戻され1.0926でクローズとなった。13日、ユーロ/ドルはユーロ圏1月鉱工業生産が弱い結果となったものの特段材料視されず、独金利・欧州株上昇を背景に週高値である1.0963まで一時上昇となり、そのまま高値圏で引け。14日、ユーロ/ドルは米2月生産者物価指数の結果が事前予想を上回ったことや、ECB要人によるハト派発言を受けて1.0881まで下落となった。15日は、米国時間に一時1.09ちょうどまで上昇となるもその後は方向感乏しく狭いレンジでの推移となり、結局 1.0888で越週した。

今週のユーロ/ドルは、FOMC等の中銀イベントを控えてボラタイルな相場になることが予想されるが、ユーロ/ドルは下落すると予想。先週からのECB要人の発言内容としては、独の景気後退懸念が払拭できない状況下、利下げ開始時期が市場予想の6月から前倒しになるかに注目が集まる。一方、米国の経済指標は直近の米2月消費者物価指数をはじめとして予想より強い内容が続いておりユーロ/ドルは下落となりやすいか。今週は、19日(火)～20日(水)にFOMCを控えており、米利下げ期待後退からのドル買いトレンドとなりやすいか。また、今週の主な経済指標・イベントとして18日(月)にユーロ圏1月貿易収支、20日(水)にはラガルドECB総裁による講演、21日(木)にユーロ圏3月製造業/サービス業PMIの発表予定となっている。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/11～3/15)の値動き:　(対ドル) 安値 1.0874　高値 1.0963　終値 1.0888
(対円) 安値 160.22　高値 162.41　終値 162.30




(資料)ブルームバーグ

## 3. 英ポンド

欧州資金部　中島　將行

**(1)今週の予想レンジ:**　1.2500 ～ 1.2900　　187.00 ～ 193.00 円

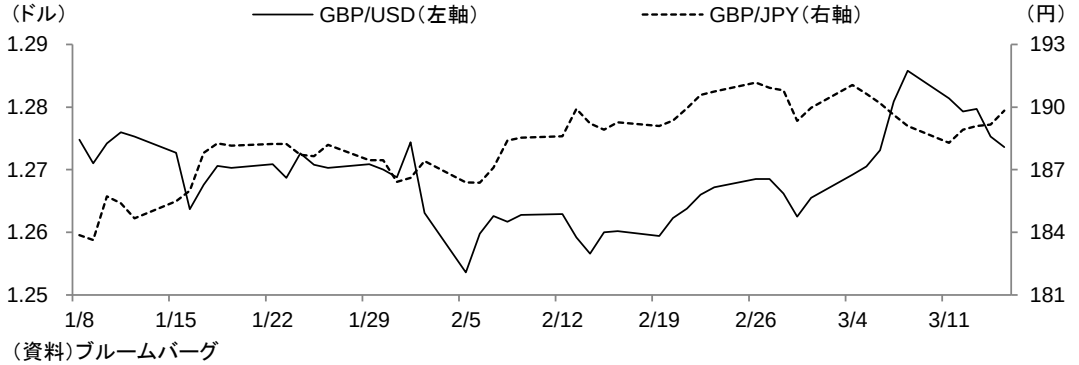
**(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】**

先週1週間の英ポンド相場は対ドルで▲0.6%下落。米金利上昇・ドル高の流れの中で、ドルに対しその他のG10通貨は下落した。ポンドはユーロや円に対してはまちまちな動きとなり、ユーロに対し▲0.3%下落した一方、円に対しては+0.8%上昇し、3月15日(金)には3月7日以来となる190円台にいったん乗せる場面もあった。ドル高の流れを作ったきっかけは明確ではないものの、12日公表の米2月消費者物価指数(CPI)、14日公表の米2月生産者物価指数(PPI)と物価指標が立て続けに市場予想を上回ったことが影響しているだろう。英国では1月GDPが発表され、市場予想通り前月比+0.2%とリセッション(景気後退)が既に過去のものとなりつつある可能性を示唆するものとなった。14日に発表された2月RICS住宅価格指数も▲10と1月の▲19から改善が継続している。これらの統計に先立ち12日には労働市場関連統計が発表されている。失業率の上昇、賃金の伸び率鈍化という流れは継続しているが、それでも、2023年11月から2024年1月までの週平均賃金の伸び率は前年比+6.1%と高水準であることには変わりがない。以下で述べるBOEの金融政策のスタンスに変化を及ぼすものではないだろう。

今週は20日(水)に英2月CPI、21日(木)にBOEの金融政策決定会合を控える。共に重要なイベントではあるが、ポンドの値動きは先週大幅なドル高の流れを引き起こした米金利の動向に支配される面が大きいだろう。対円では19日(火)の日銀の金融政策決定会合も重要だ。BOEは現在5.25%の政策金利を据え置くと見られるが、各委員の投票行動に変化が見られるかが焦点となる。2月は利上げ支持が2票、据え置きが6票、利下げ支持が1票だった。BOE前日のCPIの統計によって見方が変わる可能性は残るものの、現時点では、賃金の伸びとサービス価格の伸びが十分に抑制されている兆候は見られず、各委員の投票行動には変化がなく、タカ派的な印象を市場に与えるものとなる公算が大きいように思われる。

**(3)先週までの相場の推移**

先週(3/11～3/15)の値動き:　(対ドル) 安値 1.2726　高値 1.2863　終値 1.2732
(対円) 安値 187.97　高値 190.03　終値 189.83




(資料)ブルームバーグ

## 4．豪ドル

金融市場部　為替営業第二チーム 松永 裕司

(1)今週の予想レンジ:　0.6500 ～ 0.6650　　96.00 ～ 98.50 円

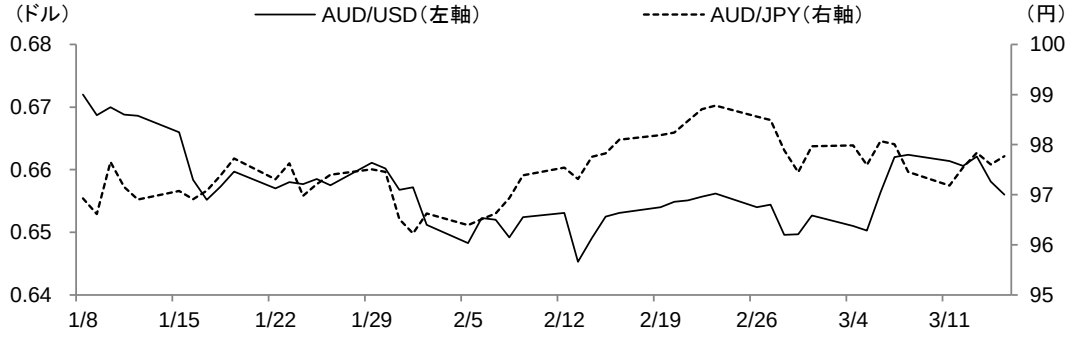
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは週半ばに0.65台半ばまで下落。11日、0.6630近辺で取引開始後、株価が下落する中、売りが先行した。翌日米2月消費者物価指数(CPI)の発表を控える中、米債利回りが徐々に上昇する流れを背景に豪ドルは頭を押さえられて一時0.66割れ。その後小幅上昇して0.6615近辺で引けた。12日、0.6620近辺で取引開始後、アジア時間内は海外時間に米2月CPIの発表を控えて小動きに終始。注目の米2月CPIはコア指数が前月比、前年比ともに予想を上回る結果となり、早期利下げ観測の後退につながった。相場は発表直後に乱高下した後、米金利の上昇につれてドルは買いが優勢となり、豪ドルは一時0.6584まで下落した。終盤にかけて再び買い戻されて、0.6605近辺で引けた。13日、0.6610近辺で取引開始後、終日かけてじりじりと上値を追う展開となった。この日、特段注目される指標の発表は無かったが、豪金利が上昇する中、豪ドルは底堅い値動きとなった。14日、0.6630近辺で取引開始後、序盤は小動き。NY時間に発表された米2月小売売上高は予想を下回り前回分も下方修正されるなど、弱い結果となったが、同時に発表された米2月生産者物価指数(PPI)が予想を上回る伸びだったことが材料視され、株式、債券ともに下落。ドルが大きく上昇する中、豪ドルは急落して一時0.6569を付けた。その後小幅に買い戻され、0.6580近辺で引けた。15日、前日の流れを引き継ぎ軟調に推移。0.6580近辺でスタート後、0.65台半ばまで値を落とし、1日を通して30pips程度のナローレンジで振幅し、そのまま0.65台半ばで越週。

今週の豪ドルは底堅い推移を予想する。今週は19日(火)にRBA会合、18日(月)～19日(火)に日銀金融政策決定会合、19日(火)～20日(水)にFOMCと各国中銀会合が注目材料。RBA2月会合では、政策金利を据え置いたものの、労働市場のタイトな状況を踏まえインフレが予想より長期化しかねないリスクを指摘し、今後の利上げの可能性を残した。足許の統計では失業率の上昇やインフレ下振れの結果が見られたものの拙速な利下げに動く可能性は低いと思われ、今回会合も政策金利の据え置きとなる公算。ガイダンスで利上げの可能性への言及が残されるかに注目したい。
FOMCも据え置きが予想されるが、予想より根強いインフレの状況を踏まえ、ドットチャートが前回から引き上げられるようであれば、ドルが対豪ドルで強含もうが、両国とも年央の利下げを見込む中、その幅は限られよう。一方、3月会合でのマイナス金利解除の可能性が報じられている日銀会合の結果公表後の相場変動には注意を払いたい。マイナス金利解除に加え、ETF買入の停止、YCC政策の撤廃が決定される場合や、今後のさらなる利上げの可能性まで踏み込んだ発言が見られれば、対豪ドルでも大きく円高が進行する可能性には警戒したい。その他、21日(木)豪2月雇用統計、22日(金)RBA金融安定報告書等の発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/11～3/15)の値動き:　(対ドル) 安値 0.6552　高値 0.6638　終値 0.6560
(対円) 安値 96.90　高値 97.97　終値 97.77




(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。